

年が参考になる。本書は、満洲国の日本人高官、憲兵隊中枢にいた人物、軍人の撫順の戦犯管理所における自述書の一部を出版したものである。満洲国統治の実態が示されている。

- 2 やはり比較的最近出版されたものでは、田中恒治郎『「満洲」における反満抗日運動の研究』緑蔭書房、1997年が、抗日運動の実態を明らかにしているが、抗日運動に関しては、後にも触れるように中国側の研究が圧倒的に多い。
- 3 撫順戦犯管理所に収容されていた人々の一部によって結成された中国帰還者連絡会のこと。雑誌『季刊・中帰連』を刊行している。
- 4 山根幸夫、他編『近代日中関係史研究入門 増補』研文出版、1996年が、日本における満洲国に関わる研究文献・論文を包括的に解題している。
- 5 その先駆けとなったのは、松本俊郎『侵略と開発』御茶ノ水書房、1988年である。松本はその後鞍山製鉄所を中心に、資料の発掘、関係者からの聞き取りを継続的に実施している。他に、山本有造の植民地経済のマクロ分析、安富歩『満洲国の金融』創文社、1997年がある。
- 6 傅雨「毀灰侵華罪証—日本侵略者銷毀档案」(『蘭台内外』〔吉林省档案局・吉林省档案学会主編〕1995年第4期、1995年7月) 参照。
- 7 井村哲郎「中国の『満洲国』関係資料」(山本有造編『「満洲国」の研究』緑蔭書房、1995年) 参照。
- 8 吉林省政治協商会議文史資料委員会が収集、発掘、整理した口述記録や回想録などを編集した「偽満史料叢書」がその代表であろう。『経済略奪』、『抗日救亡』、『「九・一八」事変』、『偽満文化』、『偽満人物』、『偽満社会』、『偽満軍事』、『日偽暴行』、『植民政権』、『偽満覆亡』。いずれも吉林人民出版社、1993年発行。他に「長春文史資料」(吉林省政治協商会議文史資料委員会)の中に、『偽満軍官学校』(1991年、長春文史資料 第35輯)、『艱辛的歷程—偽満軍官学校の学生們』(1994年、長春文史資料 第45輯)、『從淪陷到解放—一九三一年至一九四八年的長春』(1995年、長春文史資料 第47輯)、『回憶偽満建国大学』(1997年、長春文史資料 第49輯)などもある。
- 9 塚瀬進「中国における満洲国史研究の状況—1990年代を中心に—」『近代中国研究彙報』第21号、1999年3月)。
- 10 井村哲郎「『東北淪陷史研究』—解題と総目次」(近現代東北アジア地域史研究会『ニューズレター』第10号、1998) 参照。なお、本誌は内部発行であり、国外での入手は困難である。
- 11 アジア経済研究所図書資料部編『旧植民地関係機関刊行物総合目録—満鉄編』アジア経済研究所、1975年。
- 12 安富歩「イギリス留学後日感—『「満洲国」の金融』と石田興平の構想—」(近現代東北アジア地域史研究会『ニューズレター』第10号、1998年)。

華僑から見た近代日本

～横浜華僑を中心に～

伊藤 泉美

華僑の日本への進出は、江戸時代の長崎での日中貿易にさかのぼり、幕末に五港が開港されると、函館・横浜・神戸に多くの中国人が進出してきた。これらの開港場に進出してきた華僑の多くは、買弁・貿易商などの商人、料理・建築・印刷などの職人であった。当時日本に進出した華僑の職業的特質は、一つは商人・職人層などの広い意味での商人集団であり未熟練労働者ではないこと、二つは仲介者とし

ての機能をもつ職業に従事していたことである。こうした職業的特質を有した華僑が日本にやってきたということは、当時の日本社会がこうした華僑を必要としていたという積極的な理由と、それ以外の華僑は排除するという消極的な理由の双方が重なりあった結果と考えられる。

日本の中にいる外国人集団、移民集団である華僑からみて日本の近代社会はどのようなものであったのかという観点から、日本の近代の特徴を考えていきたい。まず、日本の近代華僑の特徴は人口規模が限られ、職業がかぎられているということである。それならば、そうした集団に規定したということには、受入側の日本の社会の特徴が反映されているのではないだろうか。そこで華僑というアジアからの移民集団を通して、近代日本の特徴を考えてみたい。

1 日本の開国・横浜の開港と中国人

現在日本で中華街といわれるものは、横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街があり、また函館には関帝廟がある。これら中華街形成の契機となったのは、幕末の日本の開国と五港の開港であり、この時期に華僑が日本の開港場に進出した。横浜の場合は、居留地、これは外国人が居住・経済活動をゆるされた場所であるが、その中の一角に中華街が形成された。横浜居留地は1平方キロたらず、これは上海租界の30分1、この限られた場所での経済活動に限定されていた。したがって、農業や鉱業などの産業に従事することはありえなかった。その中で華僑はどういう役割を果たしてきたのか。結論的にいえば、西洋人と日本人との仲介者としての役割をはたしてきた。

2 横浜華僑社会の歩み

幕末日本が開国し、横浜の港がひらかれると、アメリカ・イギリス・フランスなど諸外国から大勢の商人が横浜を訪れた。彼らは居留地に商館を開いて商売をはじめたが、西洋商人は横浜進出にあたり、中国人をともなってきた。中国人は漢字によって日本人と筆談ができたため、生糸や茶などの取引の現場では不可欠な存在であった。その典型が「買弁」で、買弁自身は相当な財産と社会的信用をあわせもち、専用のコックや会計係などの雇い人のグループをともなってきた。彼らが徐々に親戚・縁者を呼寄せたかたちで横浜の華僑人口が増加していき、華僑社会が形成されていった。¹

明治初年には横浜の中国人人口は約1000人、彼らは関帝廟、中華会館、劇場などを設け、中華街を築いていく。その後日中間で日清修好条規が結ばれ、横浜に中国領事館が開設される。その後明治27（1894）年の日清戦争で一次華僑人口が三分の一に減少するが、戦争終結とともに活況をたいていく。明治の末に発展をとげたが、その後の関東大震災、そして日中戦争と震災・戦災で大打撃を受けるが、戦後のやみ市で復活し、近年はバブル期のグルメ・ブームで中華街がさらに発展した。

3 横浜華僑の経済活動

さて、横浜華僑の経済活動について考えてみると、現在の横浜中華街を思い浮かべると、中華料理業あるいは中華食材販売に偏っているようだが、明治・大正時代は職業に広がりがあった。特に居留地の時代は中でも多様性を有していた。たとえば、活版印刷、西洋建築、ペンキ塗装、西洋楽器、洋裁などの分野で華僑が活躍した。こうした当時の日本人がまだ身につけていなかった近代的な技術を、香港や上海からきた中国人が日本の社会に伝えたという、技術移転での役割も指摘できる。また、居留地

貿易の時代には、西洋人と日本人との間にたつ買弁は、言葉や商業慣習の上からも不可欠な存在であった。こうした華僑がいなければ日本の居留地社会・外国貿易はなりたたなかつたと言えよう。また、華僑自身も海産物商などとして独立し、北海道産の鮑やなまこなどの中華食材を香港・上海に輸出したり、台湾砂糖を日本に輸入したりする華僑貿易商として成長していく。²

4 居留地撤廃と内地雑居

こうした華僑の職業に変化が起こるのは、今から100年前、1899年に実施された居留地撤廃にともなう勅令第352号、所謂内地雑居令の施行によってである。居留地撤廃にともない、それまで居留地の中に限られていた外国人の居住・経済活動が日本国内のどこでも可能になったため、その是非をめぐる議論が展開された。所謂内地雑居論である。その結果、特に中国人の内地雑居に関して、労働力の流入、風俗・習慣の混乱という理由から、制限的な内地雑居となった。つまり、「農業、漁業、鉱業、土木建築、建造、製造、運搬等の労働に従事する者（家事・給仕は除く）」は旧居留地以外での就労を禁じられた。これは中国人の未熟練労働者を拒否する事実上の職業制限であった。³ これが日本の華僑の職業構造に変化をもたらした一つのきっかけであった。日本の近代化を考える意味で条約改正は大きなポイントであるが、現在の在日外国人の状況を考える上でも、百年前の日本人の選択が重要な問題である。

5 近代日本社会における華僑の存在

さらにもう一つ、華僑から見た近代日本を考える時、彼らにとって近代日本は low risk , low return な、つまり危険も少ないが儲けも少ない社会でないかということである。確かに近代における日本と中国の関係は平穏なものではなかったが、日本の社会は宗教対立・民族対立が少ない社会である。それは昨年からのインドネシアの混乱を見れば顕著である。わずかな人口の華僑・華人が経済の大半・中枢を掌握し、財閥を形成してきた東南アジア諸国の状況に比べれば、近代以降、華僑の経済力が日本の経済全体に占めてきた割合はわずかなものである。こうした問題をどう考えるのか。これは近代日本社会の安定度・成熟度との関わりが指摘される問題であろう。

最初に説明したとおり、日本の華僑は人口規模が小さく、職業的にも都市的商人層に偏り、農業、鉱業などへの従事者はいない。この理由はこれまで述べてきた通りである。若干数字が古いのが、1993年末段階で日本に居住する中国系の人々は、ほぼ30万4000人で、それは日本の人口の0.3%に満たない。⁴ 一方、インドネシアでは、人口4%の中国系住民が、経済の8割（98年5月段階）を握り、生産、流通、金融、サービス業など、経済のさまざまな分野の中枢から末端までをおさえているという状況である。日本では横浜中華街においてさえも、中華料理店は中国人の経営が多いが、食肉、鮮魚、青果の生鮮食料品という、地元のマーケットとむすびついているところは日本人が担っている。こうした現地経済へのかかわり方、浸透度合いといったものも、華僑の経済力の伸長に大きな鍵となる問題であり、近代日本が外国人集団である華僑にとって、どのような社会であったのかを知る上のキー・ポイントであろう。

注

- 1 横浜中華街の形成に関しては、拙稿「横浜華僑社会の形成」（『横浜開港資料館紀要』第9号）を参照のこと。
- 2 居留地時代の横浜華僑の職業に関しては、『横浜中華街—開港から震災まで』（横浜開港資料館、1994年）を参照の

こと。

- 3 許淑真「日本における労働移民禁止法の成立—勅令第 352 号をめぐって」(『アジアの法と社会』(1990 年)、同「労働移民禁止法の施行をめぐって」(『社会学雑誌』第 7 号、神戸大学社会学研究室、1990 年)
- 4 『華僑華人—ボーダーレスの時代へ』(東方書店、1995 年) 122 頁

質疑応答

司会：小風 秀雅

問：宮尾正樹（お茶の水女子大学）

お茶の水女子大の宮尾と申します。中国の近代文学を専攻しています。3 人とも大変面白いお話、ありがとうございました。ジェミールさんにお伺いしたいことがあります。

先程、近代の初期にトルコでは日本の近代化に対する考え方として、二つの見解がありまして、一つは指導者層の考え方、もう一つはナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者が、日本人の愛国心とか近代的な諸制度、優秀な指導者の存在などを理由として考えたとおっしゃいました。ナショナリスト、イスラム主義者というのは二つ並べてもそれほど変ではないんですが、欧化主義者まで入れると、今からみれば異質な人達が同じような立場に立ったというのが非常に面白かったのです。これは今から見ればこう分けられる要素があるけれども、当時であってはそれほど別の立場にあると考えていたのではなく、いってみれば一種の近代主義者のような形で存在していたのでしょうか。それとも当時からすでにそれぞれがナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者としてのアイデンティティがあったのか、その点を伺いたいと思います。

答：ジェミール・アウドン（ハーヴァード大学・院）

あの時代も、そういうナショナリスト、イスラム主義者、欧化主義者という分別がありました。しかし、とくに 1910 年後に雑誌に集まった人達ですが、日露戦争の頃は全部同じ意見、彼らが主張したのは同じです。トルコ史を勉強している人には面白いことは、我々は彼らのなかの差異を強調しますが、共通点もたくさんありました。そうした共通点は、日本に対する態度からわかります。皆力のある国を作りたいとか。イスラム主義者もある程度モダニストです。彼らも近代化したいのです。

ただニュアンスの違いとしては、後のことですが、イスラム主義者は日本が伝統的な文化をよく守ったことを強く主張していますが、欧化主義者たちはこれをあまり主張せず、ある程度東洋の国は西洋の国になれるということを主張しました。

問：アン・ウォルソール（カリフォルニア大学アーヴァイン校）

アンと申します。専門は近代日本史です。伊藤さんに大変面白いご報告を聞かせていただいて、ありがとうございます。アメリカの場合、中国人が入るとき、男性で労働者のほうが多かったのですが、日本人は開港する時、大体中間層として入ってきたとおっしゃったのですが、それは男性ばかりだったのでしょうか、そうしたらいつから女性が入るようになったのでしょうか。

答：伊藤泉美（横浜開港資料館）

日本の場合、最初は男性中心です。統計資料から見ると、1870 年から資料がありますが、1875 年段